

日本独文学会
2019年 秋季研究発表会

研究発表要旨

2019年10月19日（土）・20日（日）

第1日 午後2時20分より

第2日 午前10時より

会場 成城大学3号館

目次

第1日 10月19日(土)

シンポジウム I (14:30~17:30) A会場 (311室)

中世的身体イメージと遊戯性 — 宮廷文化に内在する逸脱の傾向 Die Vorstellung des mittelalterlichen Körpers und das Spielerische – eine der höfischen Kultur immanente Tendenz zur Abweichung

司会: 嶋崎 啓.....	5
1. 英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』における遊戯性の意味 渡邊 徳明.....	6
2. フランス中世文学における規範と逸脱: 『シャルルマーニュの巡礼』の場合 高名 康文	6
3. ナイトハルトのリートにおける逸脱化と暴力的な「笑い」 伊藤 亮平.....	7
4. ヴィッテンヴィーラー『指輪』における宮廷的な卑俗な身体 嶋崎 啓.....	7
5. コメニウスの『遊戯学校』と王の表象 山崎 明日香	8

口頭発表: 語学/ドイツ語教育 (14:30~16:25) B会場 (312室)

司会: 境 一三/阿部 一哉.....	8
1. 視点と文構造—ドイツ語と日本語を比べる 成田 節.....	8
2. 文法習得とアクティブでコミュニカティブな授業の両立を目指して 柏木 貴久子 (共同発表者: Goesch, Bettina)	9
3. 日本人ドイツ語学習者の WTC (Willingness to communicate) とクラスルーム内要因 山田真美.....	9

シンポジウム II (14:30~17:30) C会場 (321室) 天国への階段—オーストリア文学における故郷表象の虚構性 Stiege zum Himmelreich. Fiktionalität des Heimatbilds in der österreichischen Literatur

司会: 前田 佳一.....	10
1. ゲオルク・トラークル「最後の詩」における祖国の死と故郷の再生 日名 淳裕.....	10

2. 「書かれたもの」の境界を問う——ホーフマンスタール『国民の精神的空間としての書物』およびアンソロジー出版活動における「空間」理念

石橋 奈智..... 11

3. „...dieses kleine Land – zufällig mein Heimatland –“ シュテファン・ツヴァイク『昨日の世界』における「故郷」オーストリアの救済

杉山 有紀子..... 11

4. 「ウィーンは燃えている」——インゲボルク・バツハマンのオーストリア表象と脱魔術化

前田 佳一..... 12

口頭発表：文学 I (14:30~16:25) D 会場 (322 室)

司会：浅井 英樹／高田 梓..... 12

1. 古代彫刻への誘い ——ヴィンケルマン『トルソーの記述』にみられる鑑賞者の痕跡

山取 圭澄..... 12

2. J・W・ゲーテ『スイスからの手紙 第一部』 ——スイスのヴェルテルの自然と芸術

今村 武..... 13

3. 完全性概念の展開 ——新旧論争からヴァイマル古典主義まで

大林 侑平..... 13

ブース発表 I (14:30~16:00) E 会場 (32A 室)..... 14

Schreiben in sukzessiven „Akkorden“? Silbenweises Schreiben durch gleichzeitiges Betätigen mehrerer Computertasten und sein Potenzial für die Sprachlehre

Markus Rude 14

ブース発表 II (14:30~16:00) F 会場 (32B 室)..... 14

Planung kollegialer Lehrbesuche (Hospitationen) mit Moodle – Möglichkeiten und Einschränkungen

Cezar Constantinescu 14

ポスター発表 (14:30~16:00) G 会場 (32C 室)..... 15

1. 日本の地方議会におけるゲーテ引用

松島 渉 15

2. ドイツ語音声伝えるパラ言語情報：ドイツ語心態詞の発話のドイツ語話者、学習

者、非母語話者による知覚 生駒 美喜（共同発表者：小西 隆之）	15
--	----

第2日 10月20日（日）

口頭発表：文学 II (10:00~11:55) A会場 (311室)

司会：須藤 勲／松鶴 功記	16
1. フランツ・カフカ『断食芸人』の語り手は何者か 三根 靖久	16
2. 認識の翻訳不可能性と作品の概念—ヴァルター・ベンヤミン『翻訳者の使命』を巡って 西村 龍一	17
3. エルンスト・ユンガーにおける自由と技術の問題 川野 正嗣	17

口頭発表：文学 III/文化・社会 (10:00~12:35) C会場 (321室)

司会：葛西 敬之／福岡 麻子	18
1. Der Einsiedler als Vorbild eines Gläubigen. Zum rein erbaulichen Element in Grimmelshausens „Simplicissimus Teutsch“. Yuya Morishita	18
2. 19世紀ロシアの作家にみるハイネ受容：ロマン主義文学を超えて 金沢 友緒.....	18
3. 貴族教育に導入された演劇教育について：ルネッサンス時代からバロック時代までの言説を手がかりに 山崎 明日香.....	19
4. F. シューベルトのリートにおける『移ろうもの』の表現 添田 久美子.....	19

シンポジウム III (10:00~13:00) D会場 (322室)

誕生、始まりのディスクール —変革と転換の文学的表現 Diskurs der Geburt und des Anfangs. Momente und Motive der Neugestaltung und Umstellung in der Literatur	
司会：磯崎 康太郎.....	20
1. いかにして復活はなされるのか — ヘルダー『復活について』と再生思想 岩崎 大輔.....	21
2. F・シラー『ヴィルヘルム・テル』における誕生の形姿 本田 博之.....	21

3. ワーグナー『ニーベルングの指環』における「未来の人間」と誕生の表現 加藤 恵哉.....	22
4. 反復と新生への願い — ドイツ語圏の写実主義、自然主義の「始まり」 磯崎 康太郎.....	22
5. 「作者の死」後に生まれるポストヒューマンの文学 — Cl・J・ゼッツの『Bot 作者なき対談』 眞鍋 正紀.....	22

第1日 10月19日（土）

シンポジウム I (14:30~17:30) A 会場 (311 室)

中世的身体イメージと遊戯性 —— 宮廷文化に内在する逸脱の傾向

Die Vorstellung des mittelalterlichen Körpers und das Spielerische – eine der höfischen Kultur immanente Tendenz zur Abweichung

司会：嶋崎 啓

中世の宮廷文化の特徴を規定することは容易でないが、優美と粗暴、節度と放縦、賢明と無思慮、誠実と裏切りといった対比を考えた場合、それぞれの対比の中の前者が宮廷文化の側にあるということにはあまり異論がないであろう。ならばそれぞれの後者の要素は反宮廷的ということになるのだろうか。

たしかに、宮廷文化が騎士達の身体的な振る舞いを是正し、更に精神性を高める教育的目的を有していたことを考えれば、人間の悪い部分を描くこと自体を楽しんでいるかのような戯画的作品は、既存の秩序からの離反、反宮廷的な文学に見えるかも知れない。しかしホイジンガーの言うように、もし文化というものの本質が遊戯にあるとすれば、上述の後者の要素、すなわち粗暴、放縦、無思慮、裏切りなども文化を構成する要素として認められるかもしれない。

遊びは、特に子供の遊びを思い浮かべるとよく分かるが、日常から区切られた独特な時空間の中で、一定のルールに従って、何かを競ったり、模倣したり、演じたりすることから成る。このような子供の遊びには、規則の中で何かを学び、成長するという教育的な要素と、身体を自由に動かし、精神を束縛から解放する娯楽的な要素の両方を含む二律背反が特徴として内包される。この二律背反はそのまま宮廷文化の特徴と見ることもできるのであり、その意味で「宮廷文化は遊びである」と言うこともできるかもしれない。

実際、宮廷文化には、制御的傾向と共に、そもそもはじめから逸脱の傾向も内在していたとも言える。たとえば、「高きミンネ」を描く抒情詩も、その多くが先行する何らかの作品を踏まえて作られるという点で規範の影響が見られるが、同時にそれは一種のパロディ化であると言うこともできる。また叙事詩においても詩人独自の創作よりは先行作品の翻案が尊ばれ、規範と前例に縛られるが、同時に登場人物は、それに依拠する先入観をし

ばしば裏切る。その意味では、後の時代の粗野な、あるいは狡猾な人間を描いた作品だけではなく、もともとこういった最盛期中世文学自体が真似を楽しむ一種の遊戯の文学だったとも考えられる。

本シンポジウムでは、中世的身体イメージと遊戯性をドイツのみならず、フランス文学の側からの視点も交えつつ考察する。また 12～13 世紀の作品のみならず、15、17 世紀の作品を扱うことで、宮廷文化の継承と離反および内在的な逸脱の傾向を時代的な変遷にも目を向けながら考察したい。その際、宮廷文化の中にある精神性と身体性の兼ね合いや遊戯的側面に光を当てたい。

1. 英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』における遊戯性の意味

渡邊 徳明

王妃クリエムヒルトの復讐に巻き込まれ、死闘の末にほとんどの主要登場人物が死ぬ『ニーベルンゲンの歌』（1200 年頃）は、半世紀後の『ヴォルムスの薔薇園』でパロディー化された。戦士たちが不平を言いながら、彼女の主催する薔薇園での決闘に、接吻と薔薇の冠を目当てに参加する遊戯と化している。この叙事詩を W・グリム（1836）は *Spiel der Phantasie* の産物と見た。この *Spiel* 「遊戯」を議論の出発点としたい。

遊戯は、シラーの定義、さらには 20 世紀以降のホイジンガーの議論（他にカイヨワ、最近の中世ドイツ文学研究者ではビルクハンなど）を踏まえれば、ルールに沿った無邪気、無意識的な逸脱と、位置づけられる。それは模倣であり演技であり、賭けである。主体・主観が制限され、既存の関係が継続しながら崩壊し、死と生が予感される中、心身はコスモスを体現する。

自律的なコスモスとしての薔薇園で、戦士たちは戦い流血する。決闘は命懸けの愚かな遊戯であり、伝統的な宮廷騎士文化と教会の権威は形だけ踏襲されるのみで茶化される。もともと宮廷騎士文化それ自体が、キリスト教に依存しつつ逸脱する世俗的な遊戯であるが、その矛盾を一人格の内部の葛藤として芸術的に昇華させたのが最盛期の宮廷文学であった。『ヴォルムスの薔薇園』にはもはやそのような昇華も調和も見られず、遊戯の渦へと吸い込まれる戦士たちは、不満や欲を口にする卑小な人物に過ぎない。そこに見られる *Spiel* の質的相違を本発表では問題としたい。

2. フランス中世文学における規範と逸脱：『シャルルマーニュの巡礼』の場合

高名 康文

12 世紀中頃に成立という説が有力な『シャルルマーニュの巡礼（あるいは「旅行」）』は、フランスの俗語の物語作品において形成された伝統規範からの遊戯的な逸脱の極めて早い例として論じられてきた。まず、王の一行が一度も戦いをすることもなく、エルサレムとコンスタンティノーブルへの物見遊山にも見える旅を続けるという物語の枠組に武勲詩の規範からの逸脱が見られる。さらに、戦いの代わりに、王と十二臣将の大ぼら（gab）とその奇跡的な実現が描かれるが、その中でオリヴィエがコンスタンティノーブルの王女と一晚に百回交わってみせるという大ぼらが描かれる。ここには『ロランの歌』以降の作品に現れる登場人物の人物像からの逸脱がみられる。

とはいえ、この逸脱に騎士文化への批判や、同時代に宮廷的な恋愛規範を創造しつつあ

った古代物語への揶揄を見るのは適切ではない。シャルルとその臣下の大ぼらは、ホイジンガーが『ホモ・ルーデンス』の遊びと競技の関係について述べた章で論じているように、戦う人の文化の本質にある遊戯性を物語っている。オリヴィエの大ぼらとその後の顛末についても、トルバドゥールのギヨーム9世が恋に見せる二つの態度と同様、同じ存在の二つの側面と説明できよう。騎士が神聖な存在であることと、陽気な冗談とは矛盾しない。騎士文化の中で「まじめ」と「ふまじめ」が分離しつつあったことが、この逸脱の遊戯の基盤にあったと考える。

3. ナイトハルトのリートにおける逸脱化と暴力的な「笑い」

伊藤 亮平

13世紀初頭に活動した歌人ナイトハルトは伝統的なミンネザングを詩作する一方、農村社会を舞台とした「農民の歌」(Dörperlieder)を多数残している。これらは従来のミンネザングのモチーフを踏襲しながらも卑猥で暴力的な表現が多く、登場人物の身体や言動をグロテスクに戯画化した「笑い」が積極的にリートに取り入れられている。またナイトハルトは農民だけでなく騎士をも嘲笑の対象としている。彼のこの態度は一見すると横暴である。しかし当時の宮廷社会では、農民のみならず騎士階級である自らをも「笑い」の対象とし、伝統的なミンネザングから大きく逸脱させるという「遊戯」によって生じる「笑い」そのものを積極的に享受する気運が高まっていた。一方で裕福な農民層においてミンネザング等の宮廷文化を受容するだけの土壌が熟しつつあり(田中、2015)、ナイトハルトはこの二つの世界を自在に行き来することで、宮廷社会と農村社会双方に内在する逸脱化傾向を促進させることに寄与したのではないか。これらの点について本発表では、ナイトハルトが描く暴力性に孕む「笑い」や逸脱した身体像に特に着目して検証を行う。その際、中世フランス文学の一ジャンルである「田園詩」(パストゥレル)の影響と関連づけながら考察する。パストゥレルに見られる「笑い」は、ミンネザングに導入する際に意図的に排除されたが、逆にナイトハルトは過度に誇張した「笑い」によって、従来の世界秩序の逸脱を促していることを本発表では主張したい。

4. ヴィッテンヴィーラー『指輪』における宮廷的な卑俗な身体

嶋崎 啓

15世紀初頭のヴィッテンヴィーラー(ヴィッテンヴァイラー)の『指輪』では、主人公ベルチの恋人メツリは戯画的に異様な姿で描写される。その際、例えば「口は海の砂のように赤かった」と表現されるが、これは「口はルビーのように赤かった」のような宮廷文学の中で定型化された表現のパロディーであり、知識がなければこの異様な身体描写のおかしさは理解できない。こうした遊戯的な表現は宮廷的な規範からの逸脱を意味するが、宮廷的な知識を必要としているという点では規範の枠内にとどまるものでもある。

『指輪』は騎士文学が衰退したあとの都市市民の文学であり、銜学的な知識の披瀝と野蛮な描写によってラブレーの『パンタグリユエル物語』や『ガルガンチュア物語』の先駆的作品とも見なされうる。しかしバフチーンがラブレーについて述べたように民衆的なものの発露を肯定的に見るというだけでは十分でない。農民たちがロバに乗って行う馬上槍試合も宮廷文化に対する批判のようにも見えるが、農民たちの粗暴な振る舞いが肯定され

ていないことを考えると、批判されているのは農民という姿で象徴的に表現される愚かな市民であり、教養主義を揶揄したラブレーとは批判の方向が異なる。愚行を戒めとして提示することによって市民の教化を目指す『指輪』はその約 100 年後に書かれる『阿呆船』や『冗談とまじめ』のように笑いを交えながら教育を目的とした文学の先駆けである。

5. コメニウスの『遊戯学校』と王の表象

山崎 明日香

本発表は、教育思想家コメニウス (Comenius, チェコ語 Jan Ámos Komenský, 1592-1670) の戯曲『遊戯学校』(Schola Ludus, 1656) を対象に、そこで描かれた王の表象とその百科全書的で脱宮廷的な身体観の意味を検証する。世界劇場的な虚構の中で造形された王は、一つの物や部分として相対化され、その機能を強調されている。ここにはイングランドの経験主義や科学主義の影響下にあるコメニウスの百科全書的な事物主義や汎知学の観点も反映している。だが、この教育思想家の反宮廷的な心的態度や全人教育的また平等主義から発展した遊戯思想の下で、権力的主体としての王の絶対化が回避され、啓蒙主義時代の国民的な教育思想へと継承されている。

従来のコメニウス研究は、宗教迫害による彼の反権威的態度や百科全書的な思想の形成を指摘している。コメニウスの造形した脱権威化された王は、世界を構成する主体同士の関連の中で、義務や強制力を生む潜在的影響力を抑制されている。イエズス会のスペクタクル演劇を基にしたコメニウスの作品では、脇役的な王は全体の統一機能を欠き、部分的表象に制限されている。百科全書的な汎知学の時代において、コメニウスの王は世界の構成物として体系化され機能が可視化される。こうした世界の諸物の提示は、一教育的な役割練習として構想された、啓蒙主義時代に向かうコメニウスのエリート教育プログラムの一環である。

口頭発表：語学／ドイツ語教育 (14 : 30～16 : 25) B 会場 (312 室)

1. 視点と文構造ードイツ語と日本語を比べる

成田 節

Perspektive/視点は多義的な概念だが、視座すなわち「話者がどの事象参加者の立場から事象を見るか」と注視点すなわち「話者がどの事象参加者に特に目を向けて事象を見るか」を区別して文の構造を見ると、相対的に見て日本語では視座が関与する表現手段が、ドイツ語では注視点に関与する表現手段がより発達しているという両言語の相違を捉えることができる。ドイツ語の文献 (Chr. Dürscheid, Die verbalen Kasus des Deutschen. 1999 など) では視座と注視点の区別は殆ど話題にされていないが、文構造に関して視点という時は概ね注視点を意味しているように見受けられる。尤もドイツ語でもアスペクトの記述に用いられる Innenperspektive と Außenperspektive は視座の違いであるというように、ある言語の文法領域全体で視座あるいは注視点のいずれかが支配的であるということではない。

本発表では、日本語のヤル・クレルと視点、動詞の態と視点、対格目的語・ヲ格目的語と視点、使役移動構文などの派生的な構文の可能性などを中心に考察する。また、日本語の迷惑受身文の主語との共通性、意味役割交替の不可能性などから、ドイツ語の与格は注

視点よりむしろ視座と関連すると考える可能性も出てくる。視座と注視点の区別は複数言語の対照だけでなく、個別言語の文法研究にも新たな視点をもたらす可能性を秘めている。

2. 文法習得とアクティブでコミュニカティブな授業の両立を目指して

柏木 貴久子・Bettina Goesch

大学の外国語教育において、4技能習得を目的としたコミュニカティブ・アプローチ、アクティブラーニングの充実は、ますます求められるようになっていく。英語教育における学習指導要領改訂はこの傾向に大きな影響を与えている。また、外国語科目シラバスにおいては言語能力の明確な目的達成が求められ、初習外国語では概ね一年間の履修でCEFRのA1が目標とされる。しかし限られた環境の中でこれを到達するのは容易ではない。労力と時間を要する能動的かつコミュニカティブな授業に、学習効率が求められるというわけだ。さらには、このような授業形態が文法習得およびその進捗と相反してしまうという教える側の心配も聞かれる。効率を意識したために明示的知識伝達への傾倒が強まるということも起こり得る。

しかしながら「コミュニケーション」と「文法」は本来、対立項として捉えられるべきではない。重要となるのは、語彙も文法も限られている初級というレベルで、実用性と遊戯性を取り入れた運用体験の提供、母語からのトランスファーが困難な日本語母語話者の負担をなるべく軽減するような、習得文法項目の段階的な設定、文法法則への気付きを織り込むことだと考えられる。本発表では、初級学習者の到達度テストの結果を分析しながら、能動的タスクの導入により「文法」と「コミュニケーション」を同時進行させる可能性について論じる。

3. 日本人ドイツ語学習者の WTC (Willingness to communicate) とクラスルーム内要因

山田 真実

Willingness to communicate (以下、WTC) は、「他者とコミュニケーションをとるかどうかが選択の余地がある場合に、コミュニケーションに踏み切る傾向」(MacCrosky & Richmond, 1987) と定義される。WTC の概念は、第一言語でのコミュニケーション研究に端を発し、SLA の分野にも導入された。第二言語での WTC については、学習者個人差要因 (内向・外向性、動機づけ、第二言語学習不安等) との因果関係性について多くの調査 (MacIntyre & Charos 1996; Yashima 2002; Wen & Clément 2003) がなされてきているものの、学習者の学習環境といった外的要因が、目標言語での WTC に与える影響についてはあまり焦点が当てられてこなかった。

上記の先行研究を踏まえ、本調査は国内のドイツ語学習者 (大学生) を対象にアンケート調査を行い、学習者のドイツ語での WTC とドイツ語クラスルーム要因との因果関係性についてモデリングを試みた。結果、以下の点が確認された。①「クラスルーム環境」を構成概念とした際、「タスクオリエンテーション」と「クラスメート間の関係性」がクラスルーム要因として示された。②しかしながら、構成概念「クラスルーム環境」から「ドイツ語学習者の WTC」への直接的な因果関係は示されず、またモデル全体の適合度に関して、いくつかの指標で十分な適合度を示すには至らなかった。以上より、ドイツ語学習者の WTC へ影響を与える要因としてクラスルーム環境のみを想定するだけでは不十分であ

り、他の要因も加味して WTC に関するモデルの構築を行う必要性が明らかとなった。

シンポジウム II (14:30~17:30) C 会場 (321 室)

天国への階段 —— オーストリア文学における故郷表象の虚構性

Stiege zum Himmelreich. Fiktionalität des Heimatbilds in der österreichischen Literatur

司会：前田佳一

20 世紀オーストリアは 1914 年（世界大戦勃発）、1918 年（敗戦、第一共和国成立）、1934 年（アウストロ・ファシズム体制成立）、1938 年（アンシュルス）、1945 年（世界大戦の敗戦と分割統治開始）、1955 年（第二共和国成立）という政治的節目のたびに文化的アイデンティティの危機に直面し、その再構築を志向してきた。その際に文学が重要な役割を担ってきたことは「ハプスブルク神話」(Magris, 1966) に関する研究を始めとして繰り返し指摘されてきた。このとき多くの作家にみられるのは、「故郷」たる「オーストリア」を文学的形象として何らかの形で理想化して描き出さんとする志向である。本シンポジウムはその「故郷」像が第一次世界大戦から第二次世界大戦後までのオーストリア文学においてどのように表象されてきたのかを、時代順に考察してゆく。

そうした「故郷」像が常に各時代のオーストリアの実像と重なるものであったなどということはありえない。例えば 19 世紀末に生まれた詩人 F. ブラウンは 1946 年の詩『天上のオーストリア』において「わたしが見たいのは地上のオーストリアではない。／天上のオーストリアなのだ」と述べ、また同世代の H.v. ドーデラーは 1951 年の長編『シュトゥルードゥルホーフ階段』において、オーストリアが経験した数々の歴史的破局を扱うことを巧妙に回避しつつ、昔日の輝かしい「ウィーン」像を虚構性の衣に包んで再構築し、好んで読まれることとなった。つまりオーストリア文学の「故郷」表象において注目すべきは単なる想起のありようではなく、作者、受容者双方にみられる、ありうべき「故郷」の虚構化への欲望である。本シンポジウムはそこでトラークル、ホーフマンスタール、ツヴァイク、バッハマンという、日本でもよく読まれてきたものの上記のオーストリア特有の文脈において十分に検討されてこなかった作家たちにおける故郷の虚構性をめぐむ問題を、各作家の受容史をもふまえつつ扱う。なおシンポジウムの表題は先述のブラウンとドーデラーの作品にちなんでいる。

日名はトラークル晩年の作品群をテキスト生成論的に考察しつつ、そこに表象される「祖国」像が詩人特有の「家族」像の再生と不可分であることを示す。石橋はホーフマンスタール晩年の講演における「精神的空間」の概念が、詩人が 1910 年代から認識していた言語共同体の不可能性から帰結する、高度に虚構性を帯びた詩的形象であることを明らかにする。杉山はツヴァイク『昨日の世界』における、記憶によって構築された、作家の内面的救済としての「オーストリア」像の内実を問う。前田はオーストリアを去ってからのバッハマンのオーストリア表象に、過去の作家たちによるオーストリアの虚構化に抗し、それを脱魔術化せんとする詩人の戦略を見出す。

1. ゲオルク・トラークル「最後の詩」における祖国の死と故郷の再生

日名 淳裕

1914年11月3日夜クラカウの野戦病院で死んだトラークル(1887-1914)の遺稿は「最後の詩 Die letzten Gedichte」という表題を付されて『ブレンナー年鑑 1915』に掲載された。本発表はこれを対象に、経験された戦争の詩における有効性を改めて検討することで、作品の背後に〈家族〉の主題が隠れていることを指摘する。トラークル「最後の詩」とは、戦争が予感させた〈祖国〉の死のイメージの中に、自らの〈家族〉の再生を模索した言語作品であったことを示すためである。

トラークルはその死後、宗教詩人(Brenner-Kreis)、郷土詩人(Nadler 1941)、没落する西洋の症例(Adorno 1951)、帝国主義の犠牲者(Fühmann 1982)など多様に解釈されてきた。彼の「戦争詩」の多くが現実の戦場ではなく出征前のインスブルックで書かれたにも拘らず、作品そのものがもつ虚構性が『年鑑 1915』の時局的編集によって損なわれたため、ハプスブルク帝国滅亡を証言するテキストとして受容されてきてしまったのである。そこで再度トラークル「最後の詩」にテキスト生成的読解を試み、『年鑑 1915』を批判的に捉え直すことで、詩人トラークルにおける虚構の現実への優越が、〈宗教、郷土、西洋、帝国〉ではなく〈家族〉を中心に生起していることを明らかとする。

2. 「書かれたもの」の境界を問う ——ホーフマンスタール『国民の精神的空間としての書物』およびアンソロジー出版活動における「空間」理念

石橋 奈智

ホーフマンスタール(1874-1929)の講演『国民の精神的空間としての書物』(1927)の主眼は、「国民(Nation)」のドイツ語圏における実現にある。この問題に作家は「精神的空間(geistiger Raum)」という独自の理念で寄与しようと試みた。先行研究では「保守革命(konservative Revolution)」についての議論が支配的であったため、本来の主題である「空間」と「書物」についての論究はいまだ十分ではない。本発表では、作家の主に1920年代の出版活動に着目することでこの理念の内容を詳察する。ホーフマンスタールは近代以降に書かれたドイツ語圏の文学作品を集め編纂する活動に取り組んでいたが、これは「国民」を読者として一つの言語共同体へと形成するような「空間」としての「書物」の構築を企図するものだった。だがこの活動は成功せず、作家の「国民」および読者の存在に対する疑いは深刻となる。ホーフマンスタールは過去の文化的遺産がわずかしき現状を変化させることができない事態に直面しながらも、「書物=空間」の理念を追求し続けた。1927年の講演もまた、この虚構の領域を築く努力の一環であったと考えられる。さらに、このような努力の背景にあるものとして、作家が1900年代より世紀転換期の認識論の影響のもと継続的に思索していた虚構性の問題についても本発表では取り上げる。

3. „...dieses kleine Land – zufällig mein Heimatland –“

シュテファン・ツヴァイク『昨日の世界』における「故郷」オーストリアの救済

杉山 有紀子

S. ツヴァイクが亡命下で執筆した自伝的テキスト『昨日の世界』(1942)の副題及び序文において自身に与えた定義のうち、「ヨーロッパ人」「ユダヤ人」に比べて「オーストリア人」という自己規定は彼にとって相対的に重要でなかったとされることが多い。しかし『昨日の世界』の第一次大戦直後及び1933年以降に関する記述では「故郷」という言葉がオー

ストリアに対して繰り返し用いられ、そこへの帰属の意志が明確に表明される。故国に対する強い愛着が亡命及びアンシュルス以降にとりわけ顕著であること、加えて回想が専ら「記憶」に基づくと強調されることは、ツヴァイクが亡命によるアイデンティティ危機に対し、今は亡きオーストリアの回想を通じた内面への救済により、自己の継続性の保証をも求めていたことが伺える。断絶した過去の再生によるこうした「故郷」の救済は、敗戦後オーストリアという国とその国民の拠り所が改めて問われる中で、ナチス時代以前からの不変の「伝統」に根拠を求めた戦後の作家らの試みに重なるものである。ただ戦後のそうした傾向の中では、『昨日の世界』の中でも亡命者にとっての「故郷」の重要性という上述の点はむしろ軽視され、理想化された旧帝国に対する懐古という面ばかりが好んで言及されるという偏りがある。以上のような受容の問題にも目を向けつつ、ツヴァイクのテキストに表出する「故郷」オーストリア像の意義を明らかにする。

4. 「ウィーンは燃えている」——インゲボルク・バッハマンのオーストリア表象と脱魔術化

前田佳一

バッハマンは1946年以降ウィーンで活動していたものの1953年に同地を去ってからはドイツの文学産業を通じて活動を行っていたため、死後も多くの場合「ドイツ文学史」の一コマに位置づけられた上で、文化研究における普遍的枠組みの中で研究されることが多かった。だがその作品の多くがオーストリアを舞台としたものであることからわかるように、実のところバッハマンは常にローカルなモチーフに囚われ続けた作家でもあった。バッハマンは戦後ウィーンにおいて19世紀生まれの旧世代作家たちと交友のあった最後の世代である1920年代生まれであったということもあり、ドーデラーら旧世代作家たちの「故郷」表象のありようと戦後の保守的オーストリア社会への批判的姿勢を有していたが、他方でフランクフルト大学での詩学講義でホーフマンスタールの『精神的空間』講演やムージェルの「カカーニエン」概念に暗示的なかたちで言及しているように、自らをオーストリア文学における「故郷」表象の系譜に積極的に位置付けるかのような振る舞いもみせていた。本発表はこうしたバッハマンの両義性に着目しつつ、そのオーストリア関連の諸テキストを横断的に考察し、作家が過去のオーストリア文学の「故郷」表象をどのように継承した上で、それを突き崩し、脱魔術化させる契機を作品内に組み込んでいたのかを明らかにする。

口頭発表：文学 I (14:30~16:25) D 会場 (322 室)

1. 古代彫刻への誘い—ヴィンケルマン『トルソーの記述』にみられる鑑賞者の痕跡

山取圭澄

『ローマのベルベデーレにあるヘラクレスのトルソーの記述』において、著者ヴィンケルマンはローマでの彫刻鑑賞を「私」から「君」への語りかけという形で報告する。なぜ著者と相対する読者が設定されるのか、本発表ではこの問題を修辞学の伝統と著者の読書体験という観点から考察する。

『トルソーの記述』は、四肢を失った古代のヘラクレス像を題材にする。ヴィンケルマ

ンは残された胴体からヘラクレスの全身を再生し、その英雄譚を自らの言葉で語り直していく。この創造的な記述方法は、修辞学のエクフラシスという概念に由来している。本来のエクフラシスは、単なる造形芸術の写しではなく、対象の明白なイメージを呼びおこす言葉の働きを示していた。いわば、ヴィンケルマンは古代芸術の断片から新たなヘラクレス像を生み出すのである。

ただ、『トルソーの記述』はそれ自体で完結した作品として提示されていない。ヘラクレスの姿は読み手によって描き上げられなければならない。この論述形式には著者自身の読書体験が反映されている。なぜなら、ヴィンケルマンの著書は膨大な先行文献の抜書きから成り立っており、他者の見解を自らの言葉に語り直したものだからだ。言葉で表現されたヘラクレス像は、四肢を失った古代彫刻と同じく、それに相対する読者を新たな図像の創作へと誘うのである。

2. J・W・ゲーテ『スイスからの手紙 第一部』—スイスのヴェルテルの自然と芸術

今村 武

本発表は、再び纏められたヴェルテルの遺稿という体裁の『スイスからの手紙 第一部』(1808年)を対象とする。『ヴェルテル』(1774年)執筆から1779年頃までの、自然と芸術の関係についてのゲーテの美学的思索を跡付けると共に、スイス派の詩人フェスリの影響を明らかにすることを目的とする。

この分野の先行研究では『第一部』のヴェルテルのディレッタント的な芸術理解や『スイスからの手紙 第二部』の自然把握との比較検討がなされているが、ゲーテとスイス派、特にフェスリとの関連は深く追求されてこなかった。スイスのヴェルテルの人物造形および同時期のゲーテに対するスイス派の美学的影響を指摘することに本発表の意義がある。

『スイスからの手紙』を構成するロッテと出会う前のヴェルテルは感傷的・疾風怒濤的な芸術観と気分を示すが、執筆当時のゲーテ自身の手紙に記された自然と芸術についての思索は『スイスからの手紙 第二部』での崇高な自然美の発見と共にゲーテの古典主義美学への移行を示している。スイスのヴェルテルは想像力と創作力の欠如するディレッタントな画家であるが、ギリシア彫刻に由来する古典主義的な裸体の均整と比例の美に対する関心は、ヴェネツィア画家の他、スイス派第二世代のJ・H・フェスリの影響を指摘できる。ヴェルテルが裸体の美を観察することに最終的には「失敗」するのは、疾風怒濤の美学からの訣別を象徴的に表現する。

3. 完全性概念の展開 —新旧論争からヴァイマル古典主義まで

大林侑平

プラトンまで遡る形而上学概念「完全性 (Vollkommenheit)」は、ストア派やライプニッツの哲学の影響によって、18世紀を通じて様々な言説に転用された。本発表ではこの概念が近縁概念「エンテレケイア (Entelechie)」や「完成可能性 (Perfektibilität)」、「美しい魂 (schöne Seele)」等とともに、「人間学的転回 (Anthropologische Wende)」と呼ばれる文化的趨勢のなかで果たした役割を明らかにし、同時代の文学作品を分析する。

バロック後期まで続いた、人間をその身体において宇宙と、その知性において神と並列させる世界観は、18世中葉までに徐々に衰退する。それに伴い通時的系統に基づく自然観、

人間観、言語観が確立する。人間本性や身体の局在性や人間知性の有限性が前提となり、人類ないしは個々の人間、そして文化を発展段階的に考察するようになる。

こうした学知の漸進的な変化のなかで、「完全性」概念の意味やそのモデルも変化を蒙ったと考えられる。文学史におけるこの変化の参照先は、自己実現・自己反省的な精神の作用が人間性を完成に導くといった範型的言説である。新旧論争時代から感傷主義を経てヴァイマル古典主義まで形を変えて続くこの言説は、ゴットシェート、F.ハーゲドルン、ラ・ロッシュ、ヘルダー、ゲーテ、シラーの諸著作に、それぞれ特徴的な形で現れる。

従って本発表の目的は、形而上学概念「完全性」の諸学知への転用を描出しつつ、これらの作品の読解を通じ、文学史上の潮流をその一端に位置づけることである。

ブース発表 I (14 : 30~16 : 00) E 会場 (32A 室)

Schreiben in sukzessiven „Akkorden“? Silbenweises Schreiben durch gleichzeitiges Betätigen mehrerer Computertasten und sein Potenzial für die Sprachlehre

Markus Rude

Forschungsgegenstand ist das Schreiben am Computer in Bezug zur Prosodie, genauer, zur Silbe als Trägerin prosodischer Merkmale. Interessanterweise lassen sich auch im Schreibprozess Silbengrenzen erkennen, sowohl bei Handschrift als auch beim Tippen am Computer, nämlich durch “Pausen” an Silbengrenzen (Nottbusch, Weingarten & Will ‘98). Dies ist ein Indiz dafür, dass bei der kognitiven Verarbeitung alle Buchstaben, die zu einer Silbe gehören, parallel zur Ausgabe vorbereitet werden. Die Anforderung an die Finger-Motorik, diese nun seriell zu tippen, wird daher hinterfragt. Die Forschungsfrage lautet, ob simultanes Tippen ganzer Silben als Option auf Standard Tastaturen nützlich ist, insbesondere fürs Sprachenlernen. Die Thesen:

(1) Die geforderte sequentielle Buchstabeneingabe ist unnatürlich und heute überflüssig. (Vereinfacht gesagt: Beim Tippen werden feinkörnige abstrakte Phonem-Sequenzen realisiert, beim Sprechen nur grobkörnigere konkrete Silben-Sequenzen)

(2) Man kann viele Silben simultan durch Mehr Tasten-Anschläge (simultanes Tippen) eingeben, ähnlich wie sukzessive Akkorde am Klavier, wobei “Buchstabensalat” automatisch korrigiert werden kann.

(3) Simultanes Tippen besitzt für die Sprachlehre didaktisches Potenzial, z. B. für das Erlernen häufiger Silben durch kinästhetische Sinneseindrücke (eine Silbe = eine Hand-Geste).

Nach Kurzeinführung (5-10 min) werden prototypische Anwendungen demonstriert (5-10 min), für Deutsch (komplexe Silbenstruktur) und Japanisch (einfache Silbenstruktur). Die gescrambelten Eingaben werden automatisch korrigiert. Die anschließende Diskussion (5-10 min) beendet einen Präsentationszyklus.

ブース発表 II (14 : 30~16 : 00) F 会場 (32B 室)

Planung kollegialer Lehrbesuche (Hospitationen) mit Moodle - Möglichkeiten und Einschränkungen

Unterrichtsbeobachtungen sind eine einfache und effektive Methode zur Weiterbildung und Professionalisierung von Lehrerinnen und Lehrern. Die Technik kann bei der Organisation helfen. In einem Pilotprojekt an der Sophia-Universität im Sommersemester 2019 wurde das quelloffene und kostenlose Software-Paket Moodle als Methode zur Planung kollegialer Lehrbesuche getestet.

Für die Verwendung von Moodle spricht die Verfügbarkeit und eine (angenommene) Vertrautheit im Umgang durch die langjährige Präsenz an der Universität. Gleichzeitig können in einem virtuellen Raum Kollegen und Kolleginnen aus mehreren Fakultäten zusammenkommen und die Kurse, die sie für Hospitationen öffnen wollen, mithilfe der Kalenderfunktion und des Forums präsentieren. Dieser Raum stellt dann ein ständig präsenten Angebot dar, das ohne Zwang und Zeitdruck in Anspruch genommen werden kann.

Die Kabinenpräsentation wird als Workshop gestaltet. Nach einer 10- bis 15-minütigen Präsentationsphase sind 10 Minuten für das Ausprobieren eines Moodle-Kursraums und weitere 15 Minuten für eine Diskussion im Plenum vorgesehen. Dieser Ablauf wird einmal wiederholt. Ich lade Sie ein, sich über den Stand kollegialer Lehrbesuche an Universitäten auszutauschen und gemeinsam über die Vor- und Nachteile von technischen Hilfsmitteln bei der Planung sowie über Alternativen dazu nachzudenken. Bitte bringen Sie nach Möglichkeit ein Smartphone o.ä. mit Internetzugang mit.

ポスター発表 (14 : 30~16 : 00) G 会場 (32C 室)

1. 日本の地方議会におけるゲーテ引用

松島 渉

地方議会では様々な目的で多様なテキストが引用される。首長や代議士は歴史上の人物のことは引用することがあり、これを文学受容の一形態と考え、ゲーテのテキストが引用されている発言を例にしてその特性を論じる。日本におけるゲーテ受容研究は、基本的に文学、芸術において作家と作品がゲーテからいかなる影響を受けているかという点を論じている。また職業創作活動の他に、一般読者や趣味創作（音楽や詩など）への影響も翻訳の種類や書籍の出版部数という点から論じられるが、議会においてどのように引用されているかという点はほとんど考えてこられなかったのではないかと。本発表では"知られざる"ゲーテ引用を例示し、政治の場における文学テキスト引用分析の一例を示す。

地方自治体は議会の議事録を公開している。発言の検索には2018年7月までネット上に公開されていた検索サービス「議事ボックス」を使用した。（このサービスは地方自治体の議会議事録を横断的に検索することができたが、諸事情により現在はサービス終了している。）発表では、2017年4月時点で検索できた800自治体における1996年から2016年までの議会議事録データの中から「ゲーテ」が引用されている発言を拾い上げ、引用の文脈と目的を整理し提示する。こういった言葉や作品から頻繁に引用されているかといった分析を図表で提示する。

2. ドイツ語音声伝えるパラ言語情報：ドイツ語心態詞の発話のドイツ語母語話者、学

習者、非母語話者による知覚

生駒 美喜・小西 隆之

音声伝える情報には、話者が意図的に表す感情、発話意図などのパラ言語情報が含まれる。日本語音声に含まれるパラ言語情報の知覚には一定程度の言語普遍性と言語依存性が見られるとされる（森大毅・前川喜久雄・粕谷英樹，2014:『音声は何を伝えているか：感情・パラ言語情報・個人性の音声科学』日本音響学会編音響サイエンスシリーズ 12，コロナ社）。ドイツ語音声においても、パラ言語情報の知覚には一定程度の言語普遍性と言語依存性が見られるのではないだろうか。

本研究では、パラ言語情報を示すドイツ語の発話の一例として、ドイツ語の心態詞 *schon* が含まれる音声を対象とし、その知覚に着目する。パラ言語情報の知覚における言語普遍性・言語依存性を明らかにするため、ドイツ語母語話者、ドイツ語学習者、ドイツ語非母語話者（ドイツ語非学習者）を被験者として、ドイツ語母語話者 10 名によって発話された「確信」「留保付肯定」「反論」の 3 つの発話意図を示す音声を用い、音声分析ソフト Praat を用いた知覚実験を行った。

本発表では、知覚実験の結果をもとに、ドイツ語母語話者、ドイツ語学習者、ドイツ語非母語話者の知覚に関する共通点と相違点を提示し、ドイツ語心態詞 *schon* の発話音声における韻律的特徴（持続時間、F0、振幅）および母音の音質に関する音響分析結果と比較・対照を行い、ドイツ語母語話者、ドイツ語学習者、ドイツ語非母語話者がそれぞれどのような音声特徴を手がかりにパラ言語情報の知覚を行っているかを考察する。

第 2 日 10 月 20 日（日）

口頭発表：文学Ⅱ（10：00～11：55）A 会場（311 室）

1. フランツ・カフカ『断食芸人』の語り手は何者か

三根 靖久

フランツ・カフカの作品『断食芸人』の語り手は、多くの場合、物語世界内に存在しないと考えられて来た。しかし、語り手が登場しないカフカの多くの作品と異なり、語り手は主人公と一体化した語り姿勢を取っていない。勿論、物語世界内に存在しない語り手が、その都度語り姿勢を変えながら語っていると見なすことも出来る。だが同時に、語り手が物語世界内に存在する人物であると受け止めることも可能である。物語の前半では、断食芸人の興行時代の習慣的な出来事が語られるのに対して、後半では、断食芸人の最期などの一回限りの出来事が語られる。もし語り手が興行時代の断食芸人の身近に居続けた人物であれば、当時の出来事の記憶が典型化され、習慣的な事実としてしか述べられなくなっているとしても不思議はない。他方で断食芸人の死が直接話法を交えて描かれるのは、語り手がすぐ間近でそれを見ていたからであると見なせる。重要なことに、その両方の語り手を担える登場人物が一人だけ存在する。それが、断食興行の際に泣き出した女性を慰めていた使用人であり、放置された檻の中に断食芸人がいることをサーカスの現場監督に申し出た使用人である。時と場所を隔てて登場するこの二人が実は同一人物であると考えれば、

この者こそが、登場人物の中で唯一、この物語を語る能力を有することになる。その場合、この物語は、この使用人による匿名の回想録であるとも見なし得るのである。

2. 認識の翻訳不可能性と作品の概念 —ヴァルター・ベンヤミン『翻訳者の使命』を巡って

西村 龍一

構造言語学者ヤコブソンの古典的な翻訳論「翻訳の言語学的側面について」(1959)は、二言語間の等価なメッセージを想定した点で批判されたが(デリダ 1989、Venuti2012)、しかし言語のパラレリズムの概念に即して、翻訳可能性と不可能性を明確にしている。だがその論点と例示を検討すれば、言語間での原理的な翻訳可能性には、記号的に伝達される認識内容に比して過剰な選択が孕まれていて、この過剰性が効果として自律する場合がパラレリズムとしての<詩>であることが明確になる。言語的認識の翻訳不可能性は、そうした認識の過剰性に由来し、それは言語<作品>の翻訳不可能性の問いとして現れる。

ベンヤミン『翻訳者の使命』は、作品の翻訳を記号的に伝達しうる認識から切り離す。そのことで翻訳は言語的認識の過剰性それじたいを「純粹言語」として志向することになり、「言語がその純粹な言語性において示される言語の唯一の形式」(Sauter2014)となる。「純粹言語」はしかし前期ベンヤミンの認識論である媒質の思想に照らすならば、ドイツロマン派論で言われる「絶対者」としての反省媒質に等しい。ロマン派論においては作品の偶然的な統一性を破砕してその理念を展開することが批評の使命だったとすれば、翻訳論においては翻訳において相互の言語の統一性を破砕し、その相互補完として純粹言語への志向性を提示することが翻訳者の使命となる。本発表ではこのテキストが、作品認識と言語との関係で浮上する言語的認識の過剰性を、およそ作品認識をひとつの時間性にそって継続させて行く「力」(ベルマ 2013)として描き出していることを明らかにしたい。

3. エルンスト・ユンガーにおける自由と技術の問題

川野正嗣

エルンスト・ユンガー(1895-1998)の自由概念は時期により大きく変化しており、例えば『労働者』(1932)においては「全体への自由」が問題であったが、『森を行く』(1951)では反対に、「個人の自由」が問題となっている。このような「自由」の変遷はユンガーの技術観の変遷と軌を一にしているのである。すなわち、『労働者』における技術は人間に自由をもたらすはずであったが、『森を行く』での技術は「総動員」運動の中へと人間を組み込み、自由を奪う恐ろしい力となっている。このように、技術の描き方の変化と自由概念の変化は連動している。ユンガーの技術論がその作品における決定的な位置を占めており、さらに、第一次世界大戦という「機械技術」との邂逅と、そのような機械技術の世界における「自由」がユンガーにとっての執筆動機であったとするなら、技術論と一体となった自由論もユンガー思想の中心的位置を占めるはずであり、その思想体系における明確な位置づけを要すると言える。

本発表の目的は、ユンガーの「自由」概念の一貫した要素を明らかにし、その思想体系を構成する中心概念として位置付けることである。ユンガーの作品においては異なる「自由」概念が提示されてきたが、自由と技術の問題を関連付けて論じることで一貫した関連性が

見出せるはずである。そこで、ユンガーが自由について述べた箇所を抜き出し、時期ごとの変遷をたどりつつ技術論と比較検討することで、その一貫したテーマと最終的な帰着点を明らかにしたい。

口頭発表：文学III／文化・社会（10：00～12：35）C会場（321教室）

1. Der Einsiedler als Vorbild eines Gläubigen. —Zum rein erbaulichen Element in Grimmelshausens „Simplicissimus Teutsch“

Yuya Morishita

Durch „Der abentheuerliche Simplicissimus Teutsch“ (1668) hat Grimmelshausen die Menschen seiner von jahrzehntelangen Krisen geprägten Zeit von Grund auf ermahnt. Vor diesem Hintergrund hat Rolf Tarot die These aufgestellt, dass Grimmelshausen sich zum Ziel setzte, als Erbauungsschriftsteller die Frömmigkeit seiner Leser zu stärken. (Tarot, 1979) Diese Ansicht könnte besonders dann tragfähig sein, wenn man den Roman vorwiegend als die Bekehrungsgeschichte des Simplicius betrachtet. Das wiederholte Scheitern des Bekehrungsprozesses von Simplicius erlaubt diese Perspektive indes nur eingeschränkt. Deswegen ist es entscheidend, das enge Verhältnis zwischen ihm und seinem Vorbild, dem Einsiedler, in den Brennpunkt der Untersuchung zu setzen. Dabei ist durchgehend zu beachten, dass es eine deutliche Spannung gibt zwischen den mit größter Ernsthaftigkeit eingebrachten Erbauungsaspekten und der humorvoll-satirischen Eigenart des Schelmenromans. Dabei vertrete ich den Standpunkt, dass die andächtige Einsiedler-Figur, zugleich Simplicius' Vater, als das Vorbild eines Gläubigen das Verhalten des Sohnes kontinuierlich beeinflusst. In dieser menschlichen Beziehung lassen sich die eigentlich erbaulichen Elemente des Romans identifizieren. Die Figur des Einsiedlers enthält eine ganz wesentlich auf der christlichen Frömmigkeit beruhende Botschaft an die zeitgenössische Welt, die im krisenhaften Umfeld Zuversicht und Hoffnung aufgegeben hatte.

2. 19世紀ロシアの作家にみるハイネ受容：ロマン主義文学を超えて

金沢 友緒

①研究対象の説明

本発表の主な考察対象となるのは、ハインリッヒ・ハイネの文学の影響を受けた19世紀中葉のロシアの作家A.K.トルストイとその友人達である。由緒ある貴族の家庭に生まれたA.K.トルストイ(1817-75)は、ロシア・ロマン主義文学の興隆に貢献した作家A.ポゴレリスキーを伯父に持ち、彼と同様にドイツ文学の影響の下に作家としての生涯を踏み出した。彼は個人的な愛を歌った叙情詩を数多く世に送り出しながら、他方で滑稽詩や諷刺詩で社会的テーマへの関心も見せていた。本発表で取り上げる、彼の「ハイネより」「ハイネの模倣」という副題を付された滑稽詩は、ロシア・ロマン主義とロシア・リアリズムの2つの文学思潮の狭間に生まれた作品である。

②先行研究の成果との関係

19世紀前半から中葉にかけて、ロシアではハイネの作品が翻訳され、愛読された。これまでの研究では、こうしたハイネ受容を彼の叙情詩人としての性格と結びつける理解が一

般的で、特に、崇高なロマン主義への関心の現れとする視点も存在している。本発表では、従来の研究におけるこうした理解が一面的なものであったとした上で、これまで看過されてきた当時のロシア作品にも注目し、19世紀中葉のロシアにおけるハイネ評価を新たな角度から捉えることを試みる。

③主張したいテーゼ

19世紀のロシアではハイネは概ねロマン派詩人として受容されていた。しかし、A.K.トルストイとその友人達においては、ハイネのスタイルは文化批判を含む多様な視点から理解されたのであり、それが彼らの手法に少なからぬ影響を与えたのである。

3. 貴族教育に導入された演劇教育について：ルネッサンス時代からバロック時代までの言説を手がかりに

山崎 明日香

本発表の目的は、従来のドイツの啓蒙期中心の演劇教育史観のなかで、研究対象として扱われることが少なかった16～17世紀後半の貴族とエリート教育に導入された演劇教育と知識人言説を検証する事である。その際に、普遍的な人格形成や、諸国統治や外交のための対話的レトリックの習得が重視された点を検討する。さらに、貴族社会の排他的で知的な文化コードの習熟に教育価値が置かれた点を、周辺諸国の知識層の教育提言を参照しつつ、演劇史的・教育学的観点からその意義と問題点を検証する。

西欧の支配の歴史の中で、貴族階級は子弟を文学的・歴史的事件を再演しながら演説術や修辞学に習熟させる演劇的な教育実践を重視した。演劇の文化政策を推進した仏や、人文主義的な宮廷社会の隆盛した伊ではこれらの言説が見受けられる。英国では雄弁術の教育推進に伴いドラマが教育過程に組み込まれた。ドイツ語圏ではコメニウスの全人教育思想の中で演劇教育が導入される傍ら、知的エリート層の子弟の教養道徳形成を担った学校演劇やイエズス会劇が開花した。バロック時代の宮廷的な教育思想から近代の啓蒙主義的な教育理念を展開したライプニッツは、自身の君主教育論に演劇教育を導入し、人民教化的な君主像の確立を模索した。支配権力の再生産と永続を支えた演劇教育は、宮廷社会の衰退と教育の国民化に伴い、市民階級の啓蒙化と公共精神や趣味向上の手段として、その有用性をさらに見出されることになる。

4. F. シューベルトのリートにおける『移ろうもの』の表現

添田 久美子

本稿は、フランツ・シューベルト(1797-1828)のリートについてヴァルター・デュル(1932-2018)の指摘した、詩と歌唱声部と伴奏のリズム上の平行的関係性が詩節を通じて変化するもの＝『移ろうもの』の表現を可能にするかを明らかにすることを目的とする。18、19世紀において、リートの形式の変遷は、一般に純粋有節形式に始まり、詩において『移ろうもの』、とりわけ情緒や主体の感情の変化を表現するという点で、変奏、あるいは混合有節形式へと発展し、その後、通作リートに至る。一方、シューベルトのリートの形式は、すでに初期の作品に通作や変則的な有節形式が現れ、創作のどの時期にも純粋有節形式が見出せる。このことに関してデュルが、シューベルトのリートにおいて音楽はこれまでのように詩に従属するのではなく、言語を共通の素材とすることで詩と対等になる。その場

合の詩、歌唱旋律、伴奏は、リズム上平行的な関係となると述べ、その点において新しい時代のリートであると主張したことは注目に値する。そこで本稿では、シューベルトの《小川のほとりの若者》D30 (1812)を研究対象とし、詩の韻律と歌唱旋律のリズム、また伴奏のリズムとがそれぞれ独立した、平行的な関係にあることを実際に楽譜上で検証した。その際、重要なことはそれらの言語に対する関与であり、この場合の言語とは人間の内面の反映であるがゆえ、シューベルトのリートは形式に依らずとも、人間の内面の多様な変化を表現しうる。したがって、詩、歌唱声部、伴奏の平行性は、『移ろうもの』の表現の一手法となりうるといえる。

シンポジウムIII (10:00~13:00) D会場 (322室)

誕生、始まりのディスクール —変革と転換の文学的表現

Diskurs der Geburt und des Anfangs. Momente und Motive der Neugestaltung und Umstellung in der Literatur

司会：磯崎 康太郎

「誕生」(Geburt)に関する考察は、死すべき人間についての考察である「死学」(Thanatologie)の背後に隠れてきた。未来に待ち受ける死が、不明瞭で人間を脅かす要因として哲学の考察対象とされたのに対して、ある人間にとって「誕生」は過去に決定された事実であるとともに、つねに他者に依存した(本人には)疑わしい出来事として哲学の対象とはなりにくかった(Lütkehaus, 2006)。とはいえ、終局(死)への意識は、生を「儚い中間点」と位置づける契機になり、そこから始点(誕生)が意識されることも珍しくない。その伝統を遡れば、ソクラテス的「産婆術」(Maieutik)は知恵の誕生を助ける術であったし、聖書と西洋の伝統においては、誕生、創造は神のなせる業だった。そのため、誕生した人間は神の似姿、神の「模造」であると考えられた一方で、二次的には親の産物として、かつて存在したことの無い、新しい存在でもある。M・ハイデガーの死の哲学を学んだH・アレントは、「誕生」を「始まりの形姿」(Anfangsfigur)とみなし、「出生」(Natalität)を「あらゆる誕生とともに世にもたらされる新たな出発点」と位置づけ、積極的に評価した(Arendt, 1958;2002)。その一方でP・スローターダイクは、人間は自身には見えない「始まりを強いられた存在」であり、産み落とされた世界が1945年以降のドイツであるならば、「悪い親から生まれ」、「背後に奈落を抱えた」状況であるため、自らの「誕生」を克服するよう説いている(Sloterdijk, 1988)。「誕生」は、こうした両極的な評価に晒されているばかりか、対立概念であるはずの「死」とも切り離せない関係にあり、じつに多彩な文脈で用いられる。それは生物の出生を意味するばかりか、キリストの受胎に象徴される宗教の根本的現象でもあり、芸術、文化、政治の領域において新しいものの生成過程を指す言葉でもある。「誕生、始まり」の形象は、汎用性の高さに応じて、もつれた言説関係の「一種の分析的探査機」(Hansen-Löwe/Ott/Schneider, 2014)の役割を果たす。

ドイツ文学においては、シュトゥルム・ウント・ドランク、古典主義、ロマン主義以降、とくに天才美学との関連で「誕生」の幻想が語られてきた。他方で、ニーチェに接続する形で、出産に関する男性的幻想、芸術の生成過程に関する従来のあるあり方への疑問視など、19世紀末から20世紀にかけての古典的近代にもその隠喩的言説が溢れている。本シンポ

ジウムでは、岩崎、本田発表がゲーテ時代の思想と文学を扱い、加藤、磯崎発表が 19 世紀後半のオペラ作品や文学傾向を扱い、眞鍋発表が現代文学のテキストを扱うことにより、18 世紀から現代に至るまでの誕生、始まりの多様な描かれ方の一端を明らかにしたい。

1. いかにして復活はなされるのか —ヘルダー『復活について』と再生思想

岩崎 大輔

J・G・ヘルダー（1744-180）は『キリスト教著作集』第一集に収められた『復活について』（1794）においてキリストの復活をその成立や解釈方法の点からきわめて客観的に論じている。『新約聖書』におけるキリストの復活の叙述においては「体の復活」が重視され、復活の信憑性は身体の物理的な実在によって高められ、真実として受容される。しかしヘルダーはキリストの復活を歴史的事実として認めながらも身体の復活については問題視しない。この姿勢はその二年後に発表された『パリングネジー 魂の再来について』（1796）においても継承され、再生における身体の同一性や身体の復活は不問とされる。ヘルダーは彼岸／此岸、現世／来世という二元的考察ではなく、議論を地上における人間世界に限定し、死後の世界についてはもはや考察しないという方法をとることで輪廻思想や復活思想とは異なる新たな再生概念、つまり人間の内的諸力の発現、自己を絶えず変革させる試みこそがパリングネジーであるという独自の再生思想を提示する。先行研究によりパリングネジー（再生）の重要性は既に指摘されているが、その際キリストの復活は考慮されてこなかった。本発表においては「再生」を「新たな誕生」ととらえ、死と生の関連、人間の在り方について確認した後、ヘルダーの再生思想とキリストの復活との関連性を考察する。

2. F・シラー『ヴィルヘルム・テル』における誕生の形姿

本田 博之

「再生」という概念は、F・シラー（1759-1805）も詩「ネーニエ」において簡潔に表しているように、想起による永遠化の議論につながる。それは換言すれば、言葉により新たな生命を得ることである。「新たな生命」と言えば、シラーにおいては『ヴィルヘルム・テル』（1804）が挙げられる。第 4 幕でアッティングハウゼンが「古いものは滅びる。時代は変わる。新たな生命が廃墟から吹き出してくる」、と述べているのだ。

『テル』研究においては、これまでフランス革命との類似性がしばしば指摘されてきた。しかし、最初は革命賛美派であったシラーも、1793 年には革命に嫌悪感まで懐いている。そのような革命を前提として 1804 年の戯曲を解釈し、シラーの政治的関心を示すものと解するのは、釈然としない。

シラーの政治的な関心を示すものとしては、「社会的かつ政治的世界が直面している根本問題に対する鍵は芸術である」という『美的教育書簡』（1795）の言葉が思いだされる。啓蒙は理性の時代であるから人々は知的進歩を遂げたはずだが、依然として時代は野蛮なままであることをシラーは批判し、革命という野蛮な方法ではなく、人々を芸術によって教育する方法を是としているのだ。そこで本発表では、『テル』と革命の関係を問い直した後、「誕生」という一種の「探查装置」を用いてテキストを再解釈し、精神的なものによる新たな誕生について考察する。

3. ワーグナー『ニーベルングの指環』における「未来の人間」と誕生の表現

加藤 恵哉

リヒャルト・ワーグナー（1813-1883）の四部作オペラ『ニーベルングの指環』（1853）が神話的世界という体裁を採りながらもそこに 19 世紀当時の社会の在り様を表現していることはよく指摘される。そのような世界に誕生する英雄ジークフリートは、「権力」に囚われず「無自覚なもの」（Unwillkür）に従って動き、19 世紀社会が置かれた状況を超えるより良い未来を示す「未来の人間」を意図して描かれている。

本発表は C・ダールハウス、D・ボルヒマイヤーの先行研究を参照しつつ、「未来の人間」すなわちジークフリートを誕生という側面から捉え直す。というのは、これらの先行研究ではジークフリートとその敵対者たち、そしてその対立構造に見られる社会批判の表現が中心に扱われており、ジークフリートの誕生という面にはあまり注意が払われてこなかったためである。

ジークフリートの誕生を捉えるにあたっては、『指環』と同時期に書かれた論文『オペラとドラマ』に描かれたワーグナーのオイディプス神話解釈や、『指環』の初期構想の時分に書かれた論文『ヴィーベルンゲン 伝説に発した世界史』におけるジークフリートとキリストを根本的に同一の存在とみなす解釈、それらの論文に影響を与えたヘーゲルの歴史哲学、プルドンの無政府主義などを参照した上で、そういった背景からワーグナーがどのように誕生の表現を創出したかを明らかにする。

4. 反復と新生への願い —ドイツ語圏の写実主義、自然主義の「始まり」

磯崎 康太郎

文学史上、新たな文学傾向や流派が「始まる」と称されるとき、そこでは差異化を目的として、従来傾向や流派の終結を告げるのが通例である。本発表では、J・シュミット（1818-86）の『国境の使者』（Die Grenzboten）誌の論説や、M・G・コンラート（1846-1927）の『社会』（Die Gesellschaft）誌の論説等を取りあげ、綱領が曖昧であるために、流派の枠組や主張そのものがいまだに議論の対象となるドイツ語圏の写実主義と、綱領を持つが、ドイツ語圏で長期的な影響力を有さなかった自然主義の文学プログラムにおいて、これらの「始まり」が何かの「終わり」とともに、いかに演出され、またそうならざるをえなかったのかを検討する。この二つの文学傾向は、フランスやロシア等、ヨーロッパの他国において強固な影響力を有したために、ドイツ語圏のそれは他国の模倣という側面、あるいは過去に存在した傾向の借用、すなわち「反復」の側面も多分に見られる。だが模倣や反復こそ、主体に新たなものが宿る要因だとすれば（Deleuze, 1968）、それらは「新生」の契機をも多分に有していたのではないか。両派の対照性（Kassner, 1947）と連続性（Aust, 2006）を指摘する論点を確認しながら、離反と反復に特徴づけられた「新生」の輪郭をたどり直し、その射程を明らかにする。

5. 「作者の死」後に生まれるポストヒューマンの文学 —Cl・J・ゼッツの『Bot 作者なき対談』

眞鍋 正紀

「作家との対談」の制作に臨んだ CI・J・ゼッツ (1982-) は、対話の現場で端正かつ文学的深みを帯びた答えを当意即妙に返せない「自身」に気づき当惑する。そう『Bot 作者なき対談』(2018)の「前書き」では語られている。いっそ生身の「作者」は抜きにして、書き溜めてある日記やメモ、作品テキスト全体を「コーパス (資料体/身体)」とし、そこから単純な検索操作をつうじてほぼ人為を介さずもっともらしい答えを選び連ねていく手法で - SNS 上の「作家ボット」たちが独自の単純な、あるいは高度に洗練されたアルゴリズムにもとづきセリフを紡ぐのと同じ仕掛けで - 本作は生まれた、とされる。この「誕生譚」の演出により、有機的身体をもつこれまで特権化されてきた知性的な自我としての「作者」に対して死が宣告される。それとともに作者と同名のシステムやミームとしての「(擬似的) 自我」があらたに誕生し、そのアウトプットの受容者 (読者) はそれを (再) 解釈し媒介して再生していくことで、その自己複製・拡散が可能となる。本作は、西欧古典的な「普遍的人間像 (フマニスムス)」の枠組みが突破され、「ポストヒューマン」(ブライドッティ, 2013) の時代が到来しつつある、という言説を、一種の皮肉な愉悦とともに矛盾を孕んで提示しているが、本発表はこの措定を検証して整理し、その意味を探る。